

令和2年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国語

試験時間 50分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全15ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄らんに記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者かんとくしゃに知らせてください。
- 試験終了後、監督者かんとくしゃの指示にしたがって問題冊子と解答用紙を提出してください。
- 問題冊子および解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとしします。

受験番号	氏名

一

次の各問いに答えなさい。

問1 次のぼうせん部の漢字の読みを答えなさい。

- ① 和やかな雰囲気。
- ② 言質をとる。
- ③ 顔が利く。

問2 次のぼうせん部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① その話はカツアイする。
- ② サツソク相談しよう。
- ③ モツパら仕事をしている。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 「理解できた」と、「わかった!」という感覚とは、本質的にちがうところがある。

「理解できた」というのは、他人からくわしい説明をうけ、それを論理的にわかることであると考えられる。つまり、これまで知らなかった知識を与えられ、それが論理的に自分のもっている知識と整合的であるという場合に、理解できたということになる。

これに対して、「わかった!」というのは、どういふ場合なのであろうか。それは、ミッシング・リンクのようなものだと考えられる。つまり、話題になっていふことに関連した知識はほとんどもっている、しかしその話題がその知識によって解釈できない、という状態であつて、そこで何かのヒントを得た結果、もっている知識によってその話題が完全に解釈できるといふことがわかつたとき、「わかつた!」ということになる。その場合はただちにその解釈結果をわかつた結果として答えることができるという場合である。

② 幾何学[※]の定理の証明の道すじを発見したという場合は、ほとんどこの場合である。先の「五〇ヤードなので柔らかさが重要であつた」という表現も、ゴルフの場面であるといふことがわかれば、ゴルフで苦勞している人にとつては「わかつた!」ということになる。この例からもわかるように、「わかつた!」というのは、知識を得たのではなく、自分のもっている知識によつて、ある状況が解釈できたといふ場合である。そのような場合には、与えられたヒント以上にくわしく理由を説明してもらう必要はまったくなく、自分の頭のなかに説明の道すじが明瞭^{りよう}に浮かび上がつてゐるのである。

A、いくら説明を聞いてもわからないといふのはどういふ場合なのであろうか、を考へてみる必要もあるだろう。説明の対象となる分野の知識をまつたくもつていない場合はどうしようもない。その人のもっている知識で理解できる基本的な概念[※]からはじめて、順次対象分野の知識を与えていくといふステップをふまねばならない。一度に一つだけ未知のことを教えるといふ、気の長いステップとなる。

これに対して、その分野のことをかなり知つてゐる人の場合はどうだらうか。一つ考へられることは、説明のなかに出てくる用語の意味・概念がわからないのでわからないといふ場合である。この場合には、その用語の意味を聞き返さなければならぬが、なんとなくわかつた氣になつて、確かめることをおこたつてしまふことによつて、わからなくなつてしまふことがよくある。

もう一つの場合は、先に述べたが、説明の言葉の意味はわかるが、その言葉で説明されている対象世界が明確にイメージできないことによつておこるわからなさである。これは、ものごとの説明は、一つの道すじだけで理詰めで説明されただけでは、人はなかなか納得できないことをしめしている。別の道すじからも説明してもらうことによつて、対象に対する理解が深まる。そして自分の頭のなかでその対象を再構築^③して、自分流に外に

出して説明することができねば、ほんとうによくわかったということにはなりにくいのである。〔B〕、いろいろな質問をして、自分のもつ対象世界のイメージを明確化し、豊かにしなければならぬ。

教えてもらったことを他の人に言ったり教えたりして、自分の知っていることを再確認するという作業をおこなうことは大切である。その作業の途中で、自分の理解したと思っていたことが、正確でなかったり、論理的におかしいということに気づくことはよくある。そこで考えなおし、自分の理解のしかたを訂正したり、またわからないところを調べなおしたりすることになる。

相手の説明は理解したが、その説明の前提としていることがほんとうであるか、そうではなく、もつとちがった場合やもつとちがった要素が前提条件にからみあつてきて、説明された結論にはたどりつかないのではないかという、半信半疑の状態の「わからない」もありうる。科学技術論文では、この種のわからなさがしばしばおこるのである。〔C〕、論文の場合は、著者にすぐ質問をして疑問を解消することができないので、わから

なさが残ってしまう。これは逆に、論文を書く人は前提条件やその他の条件的要素を明確にするとともに、対象としている場面ではそれらの条件以外のことは生じないということを、十分な説得力で述べることが必要であることを示唆しているのである。

レイチエル・カーソンの『沈黙の春』などを読むと、各章で述べられていることがわかるということのほかに、一冊の本を読み終えたあとに全体が言っていること、またそこから暗黙のうちに訴えてくるものが何かということが、ゆつくりと深く読者に浸透してくる。現代という時代の背負っている重い課題、これからの時代に顕在化してくるであろうもろもろの深刻な課題といったことに、思いが行かざるをえない。そういった、「わかった!」というのとは対極にあるものごとのわかり方もある。しかし、これには科学技術あるいは社会についての、広く深い知識と関心とをもっていることが前提となる。科学技術の今後を考えていくうえにおいて、このようなものごとの理解のしかたはとくに重要であろう。

(長尾真『「わかる」とは何か』)

※整合……整い一致すること。

※幾何学……数学の一部門。

※概念……ある事物についてのおおまかな意味。

※示唆……それとなく気づかせること。

※顕在……はつきりあらわれて存在すること。

問1 ぼうせん部①『理解できた』と、『わかった!』という感覚とは、本質的にちがうところがある」とあるが、「理解できた」に当てはまるものはA、「わかった!」に当てはまるものはBで答えなさい。

- ア 算数の公式を覚えたが、授業中の問題演習では解くことができず、帰宅後、家の人に聞いて再度挑戦してみたら解けた。
 イ たくさんの歴史上の人物を自分で本を見て覚えたが、大河ドラマを見たらそれらの人間関係も把握することができた。
 ウ 環境問題の説明を聞いて、今の世界の現状を把握し、これではいけないと思いつかりとゴミの分別をしようと思った。
 エ 中学校入学前はアルファベットも分からないで困っていたが、入学後の英語の授業を受けたことで習得できた。

問2 ぼうせん部②「自分の頭のなかに説明の道すじが明瞭に浮かび上がっている」とはどういうことか。説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 問いかげられることで、自らの頭が直感的に判断をし、結論までをしつかりと提示する、ということ。
 イ 与えられたものが不十分であれば、それを補い完璧なヒントを提供することができる、ということ。
 ウ 与えられたものから自らの頭で関連させて考えられることで、それ以上の結論に達することができる、ということ。
 エ 与えられたものと、以前から自分が持っている知識によって、結論まで導きだすことができる、ということ。

問3 A、B、Cに当てはまる言葉として最もふさわしい組み合わせを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A また B それとも C ただし
 イ A しかし B なぜなら C さらに
 ウ A 逆に B したがって C しかも
 エ A ところが B だから C そこで

問4 ぼうせん部③「再構築」とあるが、何を、どうすることか。四十五字以内で説明しなさい。

問5 ぼうせん部④「わからなさが残ってしまう」とあるが、そのような現象がおこってしまうのはなぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア 読み手に知識がないため。

イ 書き手による配慮りよがないため。

ウ 聞き返すことができないため。

エ 専門用語を多く使用しているため。

問6 ぼうせん部⑤『「わかった!」』というのとは対極にあるものごとのわかり方」とはどのようなものか。最もふさわしいものを次の中から一つ

選び、記号で答えなさい。

ア その一部分を解釈することで、おおまかな全体像がイメージできるようになり解釈できるようになる。

イ その一部分が解釈できることで、他の部分も解釈できるようになり、やがてそれが全体の解釈へとつながるようになる。

ウ 一つの部分が解釈できるとまた次の部分というように、一つずつ丁寧に解釈していくことで、他の課題に気づくことができるようになる。

エ 部分的な解釈ができることのほかに、その全体像から浮かび上がってくる課題にも気づくことができるようになる。

問7 本文の内容として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わからない」ときは、わからないなりに自分で創意工夫をし、周りの人に「わからない」状態であることを悟さとられてはならない。

イ 「わかった」や「理解できた」は大切なことであり、このようなことは周りの人たちと感情を分かち合い共有するのがよい。

ウ 「わからない」には、説明はしっかりと理解できるが、その理解したことが不確定かもしれないという、半信半疑のものもある。

エ 「理解できた」には「知識と関心」が重要であり、その一例として『沈黙の春』を読むことを筆者は読者にすすめている。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

美里中学校の将棋部員であった僕（優太）とモー次郎（山田幸次郎）は、水泳部と将棋部顧問であるウガジン（宇賀神）に水泳部に強引に入部させられる。なぜならこの水泳部には正規の部員が姫（岡本暁人）という男子生徒一人しかいないからだ。また、ウガジンは社会科の担当であり、生徒指導に非常に厳しい先生である。

「いったいおまえは、どういふつもりでそんなことをしてるんだ！」

プールの入口まで戻ると、ウガジンの怒鳴り声が聞こえた。びっくりしてモー次郎と顔を見合わせる。おそろおそろプールサイドに行ってみると、ウガジンと姫が間近で向かい合っていた。

ウガジンは怒りの形相だ。両手を腰のあたりでぎゅつと握り、いまにも殴りかかりそうだ。なにをあんなにも怒ってるんだらう。A 的に、姫はへらへらと笑っている。なんだかやばい雰囲気だ。

「もう一度訊くぞ。おまえは、どういふつもりでそういうことをしてるんだ」

「そんなに深い意味があつてやつたわけじゃないっすよ。ちよつとかっこいいかなあつて思つて」

姫が笑いながら髪を掻き上げた。耳があらわになつて、耳たぶに赤いピアスが見えた。小さくてきらきらとした石だ。ガーネットだろうか。

「ありゃー」

モー次郎が緊張感のない声をあげる。ウガジンと姫がぼくらに気がついた。姫はうんざりとした目つきでこちらを見る。助けてくれよ、と訴えてきていた。

「岡本。ちゃんとこっちを向け」

ウガジンがまた怒鳴る。姫は渋々前を向いてから言った。

「わかりましたよ。取ればいいんでしょ、取れば」

姫がピアスをはずそうとする。

「そういうことを言ってるんじゃないんだよ。自分がたつたひとりの正規の水泳部員だつて自覚はなかつたのかつて訊いてるんだ」

「正直に答えたほうがいいですか」

「なにい？」

「いや、正直言えば、ぜんぜんなかったんで」

「お、ま、え」

ウガジンの顔が鬼の面のように変わった。だが、必死に怒りをのみ込んだらしい。一度がつくりと肩を落としたあと、穏やかな表情でこわいくらい静かに言った。

「岡本。あのとき、おれがどんなに大変な思いをして水泳部を残したと思う？」

ぼくらが一年生のときのことだ。美里中水泳部の三年生が、海王市にある海王中の水泳部にけんかを吹っかける事件があった。しかも、水泳大会が開かれている最中にだ。自由形リレーで負けた腹いせに因縁をつけたらしい。

けんかはその場ですぐに治められた。けれども、後日、美里中の三年生部員が二年生を引き連れて、海王中に乗り込んだのだ。木刀や鉄パイプを持っていったので、警察沙汰となった。三年生と二年生は全員退部となり、水泳部は廃部が決定的になった。もともと水泳部はガラが悪いことで有名で、新入部員もろくに入らない部であったため、学校としてもいい厄介払いになるとよろこんでいたらしい。

しかし、そこでウガジンがひとり廃部に大反対した。理由は一年生だからということだけじゃなく、置いてけぼりになったのが、小さいころから海王市のスイミングクラブに通い、たくさん記録を打ち立ててきた将来有望な選手だったからだ。その姫のために、水泳部を存続させようががんばったのだ。

そして、そのウガジンの思いは見事に実った。姫はいまや二百メートル自由形の県中学記録を保持している。一分五十九秒三五。本当にすごい記録なのだ。

「なあ、岡本。おまえのために水泳部を残したんだぞ。学校の反対を押しきってな。それなのにおまえは……」

姫は困ったような笑みを浮かべた。

「おれだって先生には感謝してますよ。水泳しか取り柄がないおれなんかのために、水泳部を残してくれて。でも、それと、これとは関係ないじゃないですか」

ふたたび髪を掻き上げてピアスを見せた。ウガジンは目をつぶって首を振った。

「見せなくてもいい。わかった。岡本の気持ちがよくわかったよ。おれの気持ちがわかっていないってこともよくわかった」

「先生……」

「学校にはピアスのことは黙だまっておいてやる。学校に来るときは必ずはずしてはれないようにしてこい」

「はあ……」

「いいな」

「はい」

「だけどな、岡本。おまえ、水泳部はクビだ」

重苦しい沈黙に包まれた。

「またまた冗談じょうたんを」

笑おうとした姫をウガジンが制する。

「本気だ。もうおまえは練習に來なくてもいい。それから、優太も山田も将棋部まじに戻もどっていいぞ。おまえらを巻き込んで悪かったな」

ウガジンは無表情のままばくらに言った。うれしいはずなのに、悲しい気持ち⑦が胸の奥おくで揺れた。なんだかウガジンがかわいそうだった。飼かい犬に手を咬かまれるという言葉は、こういうときにふさわしくないかもしれないけど、選手として大切に育ててきた姫に、あっさりと裏切られるなんて同情せずにはいられない。見ていられなくて、ぼくは思わず目を伏ふせた。

ところが、モー次郎が場ちがいなよろこびの声をあげた。

「ほんとですか！ もう水泳部すいようぶに來なくていいんですね。やったあー」

はしやぎ声にめまいのようなものを覚えて、モー次郎の尻しりに強烈な蹴けりを見舞まってやった。すぐに耳打ちする。

「よろこぶところじゃないだろ」

「なんでさ」

モー次郎が睨にらんでくる。ほんとに空気の読めないやつだ。

ウガジンが呆あきれきつた視線でばくらを見てから、姫に向きなあった。

「岡本。おまえは泳ぐことにかけて本当に才能があるよ。でもな、いくら才能があっても心がついてこない人間をおれは認めない」

とどめの一撃げきだと思った。もしくは、ウガジンにとっては勝負のひと言だ。もしこれで姫が心を改めなければ、もうあきらめる。そんなふうこえたに聞こえた。

「先生。すいません。おれクビなんていやです」

反省したのか姫がぼそぼそと言った。ぼくはほっとした。ウガジンの表情もやわらいだ。その口元がほころんでいるように見える。ウガジンだつて本心では姫をクビになんかしたくないはずなのだ。ふたりはいままで二年あまり、二人三脚^{きやく}で水泳を続けてきたのだから。

これにて一件^⑧落着だ。あとは姫が頭を下げるだけだ。しかし、空気の読めなかったモー次郎を、どうやって叱^{しか}つてやろうか考え始めたそのときだ。姫がふやけた笑みを浮かべて、思いもしなかったことを言った。

「クビはやめてくださいよ。こんなしよぼい水泳部をクビになったなんてみんなに知られたら、かつこ悪いじゃないですか。おれからやめたつてこ
とにしてください」

「お、お、岡本！」

声は雄叫^{おたけ}びに近かった。もしすぐそばに巡回^{しゅん}に出ている警察官がいたら、すぐさま飛んできただろう。

「岡本。おまえつて人間が、よくわかったよ」

「最後の最後ですが、先生にちゃんと理解してもらえて光栄です」

「ふざけるな！」

ウガジンはそばにあったパイプ椅子^{いす}を蹴り飛ばした。パイプ椅子はアルミ製のコースロープの巻取器に当たつて、けたたましい音を立てた。モー次郎が亀^{かめ}のように首をすくませる。

「解散！ 水泳部は解散だ。おまえら勝手にしろ！」

怒鳴り散らすウガジンと目^⑨を合わすこともできない。ぼくは必死にプールサイドのコンクリートを見つめ続けた。すると、ウガジンはぼくらのわきを通つて校舎へと戻つていった。

「姫。いまのはまずいって」

「そうか？」

姫は平然としている。

「あんなに怒つてたじゃんか」

「たいしたことねえだろ」

「ほんとにやめるつもりなのか」

「そうだよ」

「姫は県の記録保持者じゃないか。勝手にやめていいのかよ」

「記録なんて」

ふふんと姫は鼻で笑うと、おもむろにシャツを脱ぎ始めた。モー次郎が首をかしげて尋ねる。

「なにをするの」

「泳ぎ納めさ。なんか文句あるのかよ」

姫は顎をぐいと上げ、モー次郎を睨みつける。

「いや、あの、ないけども」

しどろもどろのモー次郎を軽蔑するようにじいっと見てから、姫は水泳パンツいっちょようになつた。振り返りもせずプールに向かつていった。手足が長くてほっそりとしたその体は、女性のファッション雑誌に出ているモデルみたいだ。

「優太もいっしょに泳ぐか」

「いや、いいよ」

「モー次郎は？」

ぶるぶると顔の肉を震わせながら首を振る。

「なんだよ。つき合い悪いな。おれの最後の泳ぎだったのに」

姫は入念に準備運動をしてから、プールの縁に腰を下ろす。黒のラテックス素材のスイミングキャップをぎゅつとかぶり、黒いゴーグルをした。注水が終わったばかりのプールは澄んでいても冷たそうだった。

「なあ、姫。もうちよつとよく考えたほうがいいよ。いまからウガジンのところに行けばまだ間に合うよ。いままでウガジンにどれだけ大切にされてたか、姫もわかってるだろ」

「もういいんだって」

「なんでだよ。どういう意味だよ」

問い詰めると、姫は少しもったいぶってから言った。

「実はおれ、海王のスイミングクラブもやめたんだ。でもさ、泳ぐことが嫌いになったわけじゃないぜ。たださ、泳いでるときだけ人に認めてもらう感じがもういやなんだよ。泳いでないと価値がない人間なのかなって疑問に思っちゃまってさ」

「姫……」

気持ちが変わらないでもなかった。

サッカーがへたになったとき、それまでぼくをちやほやと褒め称えていた周りのやつらがいきなり離れていった。親友だと思っていたやつまで、ぼくに勝てると思った途端、急に態度が冷たくなった。そして、膝を痛めてからは最悪だった。いらいらして、気持ちが塞ぎ込んで、周りがみんな敵に見えるようになって、気づいたらひとりぼっちになっていた。完全に孤立していたのだ。

孤立したのはそれまでぼくが[B]になっていて、周りのサッカー部員を少しばかり見下していたせいもあっただろう。それは認める。悪かったと思う。けども、いくらなんでもみんな簡単に手のひらを返しすぎた。離れていきすぎた。そんなにもぼくはサッカーをすることしか評価されない人間だったのだろうか。

暗い気持ちになって黙ると、モー次郎が口を開いた。

「でもさ、岡本くんが泳ぐことで認めてもらってるのは本当のことじゃん。水泳をやめちゃったら、誰からも認められなくなっちゃうんだよ」
 ばかなやつだ。なんで逆なでするようなことを口にするんだろう。

「うるせえよ」

姫が凄んだ。

「けどさ、認めてもらえるものがあるっていいことだとぼくは思うよ。それなのにやめちゃうなんてもったいないじゃん」

（関口尚『空をつかむまで』）

問1 ぼうせん部①「顔を見合わせる」は、二人のどのような様子を表現しているか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何が起こっているのだろうか、という緊張した様子。

イ 誰がいるのだろうか、というどきどきした様子。

ウ どうしたらいいのだろうか、という困惑わくした様子。

エ これからなにおこるのだろうか、というわくわくした様子。

問2 Aに当てはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 反対 イ 対照 ウ 逆接 エ 交換かん

問3 ぼうせん部②「そういうこと」とは何か。説明しなさい。

問4 ぼうせん部③「うんざりとした目つき」になっている理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ウガジンに説教をされているところをぼくらに見られて、いらだっているから。

イ ウガジンになにを言ってもこちらの言葉が聞き入れてもらえず、理解されないから。

ウ ウガジンが説教の時に必ずする自慢話まんは、聞いていても何のためにもならないから。

エ ウガジンに説教をされることが姫にとって一番嫌いなことであり、面倒なことだから。

問5 ぼうせん部④「肩を落とした」とあるが、このときの「ウガジン」の心情として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いが姫に通じていなかったという落胆した気持ち。

イ 自分が姫のことを理解していなかったと自信をなくしてしまった気持ち。

ウ 関係のない僕たちを巻き込んで申し訳ないという謝罪の気持ち。

エ 三人しかいない部活でこんな問題が起こってしまったという情けない気持ち。

問6 ぼうせん部⑤「おれの気持ち」とはどのような気持ちか。説明しなさい。

問7 ぼうせん部⑥「はあ……」に込められている姫の気持ちとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ウガジンの説教が長いのもういい加減終わりにしてほしい、という願望。

イ いつもは生活指導に厳しいウガジンがこの件を黙っていてくれることに対する困惑。

ウ ウガジンの言っていることが自分には全く納得できないという不満。

エ 仲間の部員のことでも水泳部のことも、もうどうでもいいというあきらめ。

問8 ぼうせん部⑦「うれしいはずなのに、悲しい気持ち」とあるがどのような気持ちか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 水泳部を辞められてうれしい反面、せっかく続けようとしていた意志を折られた悲しい気持ち。

イ 水泳部を辞められてうれしい反面、将棋部にはもしかしたら戻れないかもしれないという悲しい気持ち。

ウ 水泳部を辞められてうれしい反面、姫も水泳部をやめてしまうという悲しい気持ち。

エ 水泳部を辞められてうれしい反面、ウガジンの大切にしていたものがなくなってしまうという悲しい気持ち。

問9 ぼうせん部⑧「一件落着」とはどのようなことになるか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 姫がウガジンに許しを求め、僕たちを水泳部に戻すこと。

イ ウガジンも姫も、元のように水泳部に戻ることに。

ウ 自分たちは水泳部に戻り、姫は将棋部に戻ること。

エ 姫がウガジンをととし、僕たちを水泳部に戻すこと。

問10 ぼうせん部⑨「目を合わすこともできない」のはなぜか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア このまま僕がウガジンに話をしても、姫が言わない限りは全く効果がないから。

イ 悲しんでいるウガジンの顔を見るチャンスなのに、姫に気を取られてしまったから。

ウ 自分の情けなく困惑している顔を見れば絶対に見られたくないから。

エ 怒っているウガジンが怖く、どんな表情で様子を見ればいいのかわからないから。

問11 Bに当てはまるふさわしい言葉を考えて、ひらがな三文字で答えなさい。

四

次の各問いに答えなさい。

問1 次の筆者と作品名の組み合わせとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 太宰治 | 『人間失格』
 イ 堀辰雄 | 『風立ちぬ』
 ウ トルストイ | 『戦争と平和』
 エ 松尾芭蕉 | 『徒然草』

問2 ア〜ウの□にふさわしい言葉をひらがなで入れ、ことわざを完成させなさい。

- ア 雨後の□
 イ 火中の□を拾う
 ウ □に火をともし

問3 同じ意味の慣用句の組み合わせとしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア とうふにかすがい | 月とすっぽん
 イ 弘法にも筆の誤り | かつばの川ながれ
 ウ 紺屋こぢやの白ばかま | 医者いしやの不養生
 エ あぶ蜂あぶちとらず | 二兎ふたとを追う者は一兎をも得ず

以下余白

—